

栽培，食物を一つの授業に

～地域と連携した生物育成と食育の授業～

<概要>

前任校では3年生の週1時間の授業の充実を考えた。技術・家庭科をただ隔週の授業で振り分けるのではなく、技術、家庭科の教師が協力し技術分野の生物育成、家庭分野の食物（郷土食）の指導内容を、2人で35時間（週1時間）の授業として単元を構成するようまとめた授業を行った。ただ、栽培した作物を調理して食べるだけの授業でなく、地域の方々と連携することにより、さらに内容を充実させることができた。

さらに、中学校と隣接している新潟大学農学部附属農場、五泉市村松地域で昔ながらの食文化の大切さを伝える農村地域生活アドバイザーから、講師として協力をしていただいた。中学校をとりまく地域との連携を通して、生徒はより深く学び、地域性を活かした授業ができた。

1. キーワードは連携

新学習指導要領で生物育成は必修になった。前任校では、地域と連携することで栽培の学習に関わる生徒の姿勢がいきいきとすることを学んだ。連携の授業とは、学校に隣接する新潟大学農学部附属農場と連携し、栽培の授業を五泉市村松地域の食文化のすばらしさを発信している農村地域生活アドバイザーと連携し郷土食の授業を行い、あわせて35時間で「栽培食物」の単元を構成している。仕事を抱え多忙な中、6年間も連携が継続していることについては、本当に感謝の言葉しかない。

2. 連携のポイントは

連携がうまくいくポイントは、いかに相手の思いをくみ取り、授業のねらいとすりあわせていくことである。栽培の連携を例にとる。栽培の学習であるから、環境を授業のねらいに考えた。しかし、大学農場の場合、広大な農地に見合う大規模な農場経営が必要になってくることから、農薬、化学肥料の使用は欠かせない。そこで、大学の農場経営に沿った農薬、化学肥料を使った実習をしながら、環境に関しては授業の中で伝えるよう計画が固まっていった。実習は大学農場をお借りして、技官の方にダイズ、ダイコンなどの栽培の実技を教えていただく。大学の准教授から、新潟の地域性を活かしたダイズ栽培のご自身の研究を講義していただく。新潟大学キャンパスから、先端技術の遺伝子組換え作物を研究している教授を派遣していただ

いた。

これら地域との連携を可能にするのは、やはり技術、家庭科の教師の連携も大切である。主に栽培を技術教師が、食物を家庭科教師が担当するが、自分の専門外は相手に丸投げというのではいい授業にはならない。2人で授業を作り上げる姿勢が大切だと思った。

3. 評価の見方が変わる「感じ方」

栽培や地域の食文化の学習は、感じ方を磨くのが大切であると分かってきた。感じ方は知識偏重の今の学びの中で軽視されてきているが、実はとても大切なことではないだろうか。授業を作り上げていく際、感じる力をどう磨くか家庭科教師と議論してきた。その中で、技術・家庭科の教科に対する見方が変わってきた。どの学年も週2～3時間と授業時数が多かった時代は、技術・家庭科は生活に必要な技術をスキルアップする教科であったことは間違いない。しかし、授業時数が減り、栽培と地域の食文化は、1回きりの学習体験である。そこで、1度きりの学習体験を通して、より多くを感じとられるような工夫が必要であると考えた。つまり、ただ漠然と体験するのではなく、より多くのことを吸収できるよう感じ方を鍛えなければならないと考えた。

具体的には、学習した内容をどう感じたかを毎時間文章でしっかりと記述させ、自分自身の生活体験と照らし合わせ考えることができるかで評価をするようにした。書くだけでは評価とならないので、授業中に生

徒が前の時間に書いた文章を紹介していくことを心がけた。それを繰り返していくと、感じ方が磨かれていくのが実感できる。つまり、自分なりの視点を持ち、体験を捉え、感想をまとめることができるようになる。技術・家庭科が、少ない体験時間で授業しなければならない以上、感じ方を鍛えることは、これから体験を評価する上で、少なからず必要になってくるのではないだろうか。

4. 実践の成果は

授業後のアンケートで 9 割以上の生徒は、「授業が好き」と答え、高い関心があった。郷土食で連携している農村地域生活アドバイザーの方の話から、授業以外の生徒との交流の話聞いた。日曜日に地域の農産物の物産フェアをしていたところ、中学生から声をかけられ話はずんだということであった。地域の方とふれあうことは、授業だけのつきあいではなく、いろいろとつながってくることを教えられた。そういうかわりも、授業が楽しいという生徒の評価につながっているのではないだろうか。

3 年生にこの 1 年間の授業で学んだことの感想を書かせたので、一部を紹介する。

・農業というと、汚れて汚いというイメージがあった。しかし、農業が大きく環境とかかわっていることを学んだり、今と昔とは食生活が全く違っていることを学んだ。自分は、農業とかに関わることはないと思うが、学んだことを通して、見方を広げることができた。

授業では、単に知識を習得するばかりではない。学んだことが、自分のこれからの生き方、考え方に影響を及ぼすことを、生徒作文を通して感じた。

5. 今後の課題

良い実践を積み上げても、公立の中学校ではどうしても避けられない転勤がある。実際この実践も、4 年目に家庭科の先生が、5 年目に技術の先生（筆者）が転勤し、担当する教師が入れ替わることとなった。しかし、学校の財産として実践を次に受け継ぐことが大切であることを感じる。地域との連携から、教師が替わっても実践を続けるだけの条件が残っているので、担当が変わっても同じ魅力を引き出せる。連携は一人だけの実践より、エネルギーが必要である。しかし、連携し協力しあうことで、ひとりで授業に取り組む以上の力が生まれてくることを学んだ。

6. 授業計画（全 35 時間 1 項目 1 時間）

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 オリエンテーション（授業の説明） | 3 ヨモギ採取 |
| 2 ジャガイモ枝豆播種 | 5 栽培基礎知識 |
| 4 除草 | 7 大学准教授講義 |
| 6 ダイズ播種 | 9 物質循環と農業 |
| 8 ゴミと肥料 | 11 ジャガイモ収穫 |
| 10 ヨモギ団子づくり | 13 枝豆調理実習 |
| 12 枝豆収穫 | 15 ダイコン播種 |
| 14 ジャガイモ調理実習 | 17 ダイコン栽培知識 |
| 16 ダイコン間引 | 19 昔の食事講義 |
| 18 生育適温と季節野菜 | 21 ダイズ収穫 |
| 20 ダイズの食文化 | 23 食料保存基礎知識 |
| 22 ダイズ脱穀 | 25 ダイコン収穫 |
| 24 味噌づくり | 27 発酵について |
| 26 たくあん漬け | 29 バターづくり |
| 28 牛乳絞り体験 | 31 遺伝子組換え講義 |
| 30 たくあん試食 | 33 食物まとめ |
| 32 栽培まとめ | 35 農業食文化のこれから |
| 34 味噌試食 | |

参考文献・参考Webページなど

- ・「地域と連携した生物育成食育の授業」（農山漁村文化協会・雑誌 技術教室 2009 年 1 月号収録）
 - ・新潟県教育庁環境学習 Web ページ
- <http://www.pref-niigata.com/kankyokyoiku/img/jirei/h17/atago.pdf>